

## 地域における子ども図書館の取り組み

—ほんごう子ども図書館を中心に—

渡辺一弘

(八戸短期大学)

### I. 問題の所在

本稿は、全国でも珍しい公設民営の子ども(児童)図書館である、広島県三原市<sup>1)</sup>の「ほんごう子ども図書館」を紹介し、地域における新しいタイプの子ども(児童)図書館の設立経緯と活動内容を検討することを目的とする。

近年、子どもを取り巻く読書環境が大きく変化しているという。例えば、『年報 こどもの図書館 2002年版』の序文においても、「2000年の「子ども読書年」を皮切りに、東京・上野に「国際子ども図書館」の誕生、(中略)読み聞かせ、朝の読書運動、子どもの読書運動の推進に関する法律など、目まぐるしい動きのなかで、さまざまなことが展開されている。(中略)最近危機感をもっている。それは、子どもたちの行動時間が変わってきていることである」(児童図書館研究会編 2003, 3頁)、との図書館員の指摘がある。このような状況は、日本だけではなく、アメリカにおいても、子どもの読書離れ、読み書き能力の低下、こうした現状を踏まえての、図書館における児童サービス活動の充実ぶりが紹介されている(菅谷 2003, 111頁)。

そうした状況のなかで、従来の学校図書館はもちろん、公共図書館の児童図書コーナー、あるいは民間や個人のグループが自由に運営している子どものためのミニ図書館である、いわゆる「子ども文庫」(竹内編 1995, 203頁)とも異なる、新たな運営形態と活動内容をもつ子ども(児童)図書館も見られるようになった。本稿で取りあげる、ほんごう子ども図書館もそのような、新しいタイプの子ども(児童)図書館の一つである。ほんごう子ども図書館は、これまで地域の広島県豊田郡本郷町(現広島県三原市本郷町)に公共図書館がなく、地域の「読み語り」ボランティアグループを初めとした、子どもたちへの教育に関心のある人々の願いを受け、郷土出身の著名な教育学者である大田堯・東大名誉教授の全面的な援助により<sup>2)</sup>、2001(平成13)年7月8日、JR山陽本線本郷駅前に開館したものである。ほんごう子ども図書館は、文字通り、子どもを対象とした図書館ではあるが、先に述べたように、従来の子ども(児童)図書館とは異なる運営形態、活動内容を持ち、その特異な設立経緯もあって注目に値する。

本稿において、このほんごう子ども図書館の事例を取りあげる具体的な意義は、主に以下の三点に集約される。

まず第一に、当地が戦後初期の著名な地域教育計画の一つである本郷プランが行われていた地域であり、その本郷プランのリーダーであった当時東大教授の大田堯が、このほんごう子ども図書館の設立に大きな役割を果たしたという、地域の歴史的背景があること。

第二に、ほんごう子ども図書館の運営の中心が、ボランティアであり、その経費の大部分は賛助会員の会費で賄われているという、運営形態自体の特殊性があること。

第三に、ほんごう子ども図書館の活動内容自体が、通常の子どもの(児童)図書館のそれを超えていると考えられること。

そこで本稿では、このほんごう子ども図書館の事例を紹介することで、従来の地域の子どもの(児童)図書館とは異なる新たな運営形態の図書館の活動を、その地域の歴史的背景や設立経緯を踏まえて、図書館の開館目的や運営の基本方針が、実際の図書館活動に如何に反映されているかを検討することを目的とする。

## II. 事例研究の方法

2002（平成14）年6月、7月、11月、2003（平成15）年8月の計4回にわたり、ほんごう子ども図書館への訪問調査を実施した。1回目と2回目の調査では、主に図書館の設立に関する所蔵資料と利用案内パンフレットや配布印刷物—各種イベントのお知らせ・案内—の閲覧・コピーと館長への聞き取りを行った。3回目と4回目の調査では、前回までの調査における補足の聞き取りと、実際の活動の様子—主に絵本の読み聞かせと、展覧会—を見学・観察した。これらを基に、ほんごう子ども図書館の概要を紹介し、その設立経緯と活動の内容・特徴を検討する。

## III. 結果と考察

### (1) ほんごう子ども図書館の概要

ほんごう子ども図書館の利用案内については、案内パンフレット、ホームページ等によると以下のようになっている。

開館時間：午前 10:00～午後 5:00

休館日：木曜日、第1・第3・第5日曜日<sup>3)</sup>、祝日、年末年始、その他特別に定める日

貸出冊数/期間：ひとり3冊 2週間

主な活動：読み語り、おはなし会（人形劇・パネルシアターなど）、かみしばい、企画展、創作（折り紙・カード作りなど）、講座・講演会

ほんごう子ども図書館の理念・運営等についてだが、先ず理念については、一般の利用者が見ることが可能な案内パンフレットやホームページ等のレベルでは、直接的な記述はほとんど無いが、案内パンフレットの冒頭に、「本と人と緑にかこまれて・・・」という大きな見出しがあり、その背景に大木のカットがあり、後に述べるとおり建物がログハウスであることなど、木の暖かみを意識していることは伺える。ほんごう子ども図書館設立の具体的な趣旨については、次の「設立経緯」のところで検討する。なお、ほんごう子ども図書館の全面的な援助者である大田堯・東大名誉教授は、この案内パンフレットに、以下のような一文を寄せている。

「わくわく ときどき よく遊び、よくたわむれ 楽しんで 本に親しむ きみたちの 想いが  
青い空に はじけて 広く 深く 未来をめざし 羽ばたくように」

次に運営については、民間ボランティア団体「ほんごう子ども図書館運営委員会」により運営されており、会費（年間）は個人会員一口3千円、団体会員一口3万円で、会員には希望により、年次報告、新刊報告などを送付している。その他に篤志家や一般からの寄付、出版社や先の会員からの書籍の寄贈、もちろん開設において全面的に援助した大田堯・東大名誉教授からも多数の書籍の寄贈があった。通常の活動スタッフは4人のボランティアで、主として地区の小学校・幼稚園・保育所等に通う子どもをもつ母親たちである。この4人が交替で勤務しており、ボランティアは常に募集中の状態であるとのことである。

図書館長の吉田達也氏は地区の元中学校校長で、常駐ではないが近所に住んでいるので、問い合わせ等には迅速に対応できる状況にある。この吉田氏は、先に述べた戦後の地域教育計画である本郷プランにおいて、大田堯・東大名誉教授と共に中心的に関わった人物でもある。当然、この館長の吉田氏もボランティアである。なお一日の平均来館者数は、55人であるという。

建物は、県内産の丸太を使用したログハウスで、光熱費と水道料金以外はすべてボランティアで運営<sup>4)</sup>しているという（吉田 2002b, 5頁）。このほんごう子ども図書館がある広島県豊田郡本郷町は、今年2005（平成17）年3月22日に、久井町、大和町とともに三原市に合併された。

## (2) 設立経緯

子ども図書館設立の趣旨は、「幼い時から優れた本と親しみ、親子で絵本を読み語ることが大事である。床に座り、寝転んで読んでもよいログハウスの図書館は、くつろぎの場所でもある。絵本、朗読、紙芝居、手品、作品展、コンサート、算数であそぼう、ささやかながら、地域文化の発信基地になるように願っている」(前掲書 2002b, 6頁)(下線は引用者、以下同様)、とあり、当初から通常の図書館活動よりもかなり幅広い範囲の活動を意識していたことが伺える。館長への数度に渡る聞き取りにおいても、「この子ども図書館を地域の文化交流の場にしたい」「コンサートや展覧会といった様々なイベントをどんどん行いたい」「子ども図書館ではあるが、子どもだけではなく地域住民にもたくさん活用して欲しい」「ほんごう子ども図書館を、本郷文化の発信基地にしたい」といった発言がくり返され、まさに「地域文化の発信基地」たらんとする意図が伺える。その理由として、当地に図書館はおろか公共の文化施設が皆無であること、戦後初期当地において著名な地域教育計画である本郷プランが行われた伝統があること、の二点を館長は指摘している。

この点については、訪問調査の結果、前者については館長の指摘のとおり、この子ども図書館が地域唯一の公共的な文化施設としての活用されつつあると筆者も感じたが、後者については、本郷プランの伝統があり、それに関係した大田氏と館長がこの図書館の運営に大いに関わっていても、むしろ新しい形の地域教育モデルという感じを受けた。但し、このことは地域教育計画や本郷プランを現在においてどう捉え、如何に定義するかによって異なる問題であるといえよう。

子ども図書館設立の経緯は、当地出身の大田堯・東大名誉教授が JR 本郷駅前の土地約 60 坪を売却して、その費用で子ども図書館を建てたいという電話を現館長にしたことに端を発する。この土地は、もともと大田夫妻の両親の土地であり、自分たちにとっては「不労所得」の土地であり、亡き妻といずれは公共に返すべきものと語り合っており、その際、自分の頭に閃いたのが子ども図書館の構想であったという。結局、紆余曲折はあったが、JR 本郷駅前の妻の実家跡を町に寄付して、その見返りに絵本中心の子ども図書館の建設ということから始まっているとのことである(以上、大田 2002, 3-4 頁)。

子ども図書館の設立に際し、地域のボランティアとして、絵本の森や朗読の会といったサークルのメンバー、元職現職の教員グループ、町内会長や PTA 会長といった町の幹部、地域のボーイスカウトといった幅広い範囲から、ボランティアが集まり、その中でも 40 代のお母さん方と 70 代の高齢者が設立運営委員会の中心メンバー<sup>5)</sup>として活動し、この設立運営委員会のメンバーが現在もそのまま引き継いでいる。これらの運営委員の町当局への働きかけが功を奏し、運営費 1000 万円が行政から支給された。但し、これは毎年支給されるというものではない。また町民の理解と協力を得るために、大田氏の子育て講演会や誓願書名活動、議員への個別訪問による働きかけ、元職現職の教員グループの教え子、同僚への呼び掛けなど(前掲書 2002b, 5 頁)、地道な活動の結果、公設民営化の子ども図書館としてスタートした。財政状況は厳しいようで、ホームページでも支援のお願いが詳細に示されている<sup>6)</sup>。このホームページ上でも示されているし、筆者も直接館長から伺ったが、建物自体は町が建てた形になっているので、地元の町民の中にも、町営図書館だと考えている人がかなりいるとのことであった。

また子ども図書館と駅を挟んで反対側に位置する、本郷小学校の東に隣接する石垣の上の竹藪の土地 500 坪を大田が取得し、「子ども広場なんじゃもんじゃ」も設立された。その設立趣旨は、「ここには自然が保存され、植物、生物の住み家である。これらに触れながら学ぶことができる。子どもは花、草、虫も好きで、本当の自然に接しないので感性を失っている。自然に興味を持つのが人間の本性。自然を美しいと思う感性を取り戻したい」とあり、現状としては、安全確保のために石垣の周囲を柵で囲い、古い井戸を活用して、釣瓶井戸と手押しポンプの井戸を作り、ヨットを埋めて池を作りメダカを飼う。作業機具などを保管するコンテナを設けて、ビニールハウスを仮設した。ここはキッチンとしても使用できるそうである(前掲書 2002b, 6 頁)。ちなみに「なんじゃもんじゃ」の名称は、子どもから募集したものである。将来的にはここに、ビオトープ(生きものの住む所という意味のドイツ語)を作る計画もあり、そのために本郷小学校の 4 年生、5 年生にアンケートをお願いし、その利用を検討するため関係者が協議しているという(吉田 2002a, 9 頁)。

そして将来的には、JR 本郷駅を挟んだ「ほんごう子ども図書館」「子ども広場なんじゃもんじゃ」「本郷小学校」を連動させて、ある意味体験学習の場の提供を模索しており、また地域の各地区に子ども図書館の分館を作り、本も循環させたいとのことであった。これらのことは、館長によると、やはり先述

のとおり、地域教育計画である本郷プランの精神の継承であるとのことであった。

### (3) 現在の活動状況（図書の貸し出し以外）

通常の図書の貸し出し以外の、現在の主な活動状況を以下に三点挙げる。

まず第一に、毎月3回行われる「おはなし会」がある。これは通常の子ども図書館でも行われるものだが、普通の絵本の読み語り以外に英語の絵本の読み語り、紙芝居なども行っている。また読み終わった後に、手作りのお土産（アクセサリー、小物等）を子どもたちに配布している。実際に見学したが、特に就学前の子どもたちは、このお土産が非常に楽しみようであった。また読み手が、通常のボランティア以外に館長その他も加わり<sup>7)</sup>、バリエーションに富んでいる感じがした。

第二に、夏休みに行われる主に小学生を対象とした算数の講座の開催などがある。これは、遊びをとおして算数・数学を学ぶもので、担当講師は、元数学の教師だった館長である。幼稚園・保育所の子どもたちも参加するそうである。一般に夏休みによく行われる、「算数教室」のかなりくだけたものようである。

第三に、有名無名、プロアマ問わず工芸作家や画家の小規模な企画展や、手作りの音楽会であるミニコンサートを開くことである。館長への聞き取りによると、地域における文化活動の一環として側面としてそのような場所の提供と、子どもたちへ実物に触れさせたいという想いの一種の感性教育の場としての側面ももつものであるとのことである。館長は、このことも本郷教育、本郷プランの精神の波及であると指摘している（吉田 2001, 231 頁）。最近のイベントとしては、本年11月に行われた本郷地区で初めて開かれた「アンネのバラ」の展示会である<sup>8)</sup>。『アンネの日記』のアンネ・フランクの父オットー氏が娘を偲んで育てていたばらが、株分けされ、平和のバトンとして各地に広まり、栽培されていて、その展示会である。この事例が象徴しているように、通常のイベントの開催場というよりも、まさに地域における文化活動の場として機能していることが伺える。

この他に特徴的な活動としては、活動場所の提供として、近所の高校のクラス活動への開放、癒し効果としての音楽セラピーコンサートの開催などもあり、通常の図書館活動の内容以外に、かなりの比重をおいていることが特徴的であるといえよう。

この近所の高校とは、今年4月に開校した広島県立総合技術高等学校で、同校の1年6組のクラス活動「イチロクプロジェクト」において、校外で取材活動をし、地域に貢献できるものとして、ほんごう子ども図書館へのボランティア協力として、掃除、読み聞かせの手伝い、チラシ作成などを行い、おはなし会では、実際に3人の生徒が読み語りもして、地域に根ざした体験学習的なクラス活動を行ったそうである。

これらの点からも分かるように、開設間もないほんごう子ども図書館が、地域教育や地域の文化活動において重要な役割を果たしつつあることが認識される。

## IV. まとめ

以上、ほんごう子ども図書館の設立に関する所蔵資料と利用案内パンフレットや配布印刷物、館長の聞き取りを中心に、概略的にほんごう子ども図書館の紹介、設立経緯と活動の内容・特徴を検討してきた。その結果、主に以下の三点にまとめることができる。

第一に、設立の経緯として、全面的な援助者である大田堯・東大名誉教授が戦後行った地域教育計画の本郷プランの精神を継承していることは、運営における地域ボランティアの結集や地域に根ざした教育実践の場としての活用からも明らかであるといえよう。但し、それは直接的な本郷プランの継承というよりも、むしろ新たな地域教育モデルであると考えた方が妥当であると思われる。

第二に、第一に関連して、各種の活動内容が、いわゆる一般の子ども（児童）図書館活動の範囲を超えて、地域の公民館の文化活動を思わせる一種の地域文化サロンのような様相を呈していることが伺える。

第三に、このほんごう子ども図書館は、地域の体験学習、総合学習の場としての機能も果たしていることが伺える。

本稿では、ほんごう子ども図書館の紹介、設立経緯と活動状況の概略的な検討に終始した。次の課題としては、子ども図書館の日々の活動状況と、現在の課題、例えば運営財源と運用の問題、学生ボラン

ティアが皆無の現状等についてももう少し言及する必要があるだろう。

## 【註】

- 1) 開設時は、広島県豊田郡本郷町であったが、今年、平成17年3月22日に旧三原市、本郷町、久井町、大和町が合併して新しい三原市になった。
- 2) 大田堯・東大名誉教授が、JR 本郷駅前の土地を町に寄付する見返りに、この子ども図書館が設立することになった(吉田 2002b)。結果として、建物は町が建てたが町営ではなく、あくまでボランティアが運営の中心である。
- 3) 平成14年6月、訪問調査における図書館長への聞き取りによると、開設当初は日曜日はすべて休館日だったそうである。
- 4) ほんごう子ども図書館の案内パンフレットによると、「このような図書館をボランティアが運営するというボランティア活動は、全国的には高知市などの先進地があります」との説明がある。これは、平成11年12月に高知市に開館した、NPO法人(特定非営利活動法人)の「高知こどもの図書館」のことである。この図書館も、ほんごう子ども図書館と同様に、本の貸し出し、お話し会、コンサート、企画展など多彩な活動を行っているという(児童図書館研究会編 2003, 150頁)。
- 5) 14名の設立運営委員の内、男性は5名、女性は9名である。この設立運営委員会が発足して丁度1年でほんごう子ども図書館は開館した。その間、会合は197回、運営委員会は26回開かれた。
- 6) ほんごう子ども図書館の運営状況が如実に表れているので、少し長いが全文を以下に示す。「全国でも珍しい公設民営の「ほんごう子ども図書館」は、開設以来今日まで順調に推移して参りました。これも皆様方のご支援とご協力のおかげと、こころより感謝しております。皆様方の会費と寄付で運営しておりますが、正直なところ運営費の捻出に苦慮しているのが現状です。図書館の魅力の一つは、素晴らしい本がそろっている事です。「ほんごう子ども図書館」には、話題になる良い本がそろえてあると、子どもたちに大変喜ばれます。新しい良い本がつぎつぎ出版されている今日、これらの本を購入するには多額の費用が必要です。年間百万円以上の本代を予定していますが、まだまだ不十分です。どうしても会員を増やし、寄付をお願いしないと、将来運営が困難になることが予想されます。建物は町が建てたので、町営だと考えている方が、町民の中にもかなりおられるようです。ボランティアで運営していることを理解していただくために、まだまだ努力し、これからも宣伝しなくてはなりません。そこで、皆様方には本年度も会員になっていただきますようお願いする次第です。「ほんごう子ども図書館」がさきやかながら、本郷文化の発信基地になるように、皆さんとともに歩んでいきたいと思っております。今後ともよろしくお願ひします。」
- 7) 筆者が訪問調査に伺ったときも、読み手が何人か変わった。
- 8) 実際の展示の様子は、ホームページ上に掲載されている。

## 【主要参考文献・資料】

- 石井慎二編 1993、『別冊宝島 EX 図書館をしゃぶりつくせ!』宝島社。  
井上真琴 2004、『図書館に訊け!』筑摩書房。  
大田堯 2002,「本郷町とわが生涯と」『本郷文化 第12号』本郷町教育委員会 1-5頁。  
児童図書館研究会編 2003,『年報 こどもの図書館 1997-2001 2002年版』(社)日本図書館協会。  
菅谷明子 2003,『未来をつくる図書館-ニューヨークからの報告-』岩波書店。  
菅原峻 1993,『新版 これからの図書館』晶文社。  
竹内哲編 1995,『講座 図書館の理論と実際 8 コミュニティと図書館』雄山閣。  
図書館調査事業委員会 2004,『日本の図書館 統計と名簿 2004』(社)日本図書館協会。  
日本図書館協会児童青少年委員会編 2004,『公立図書館児童サービス実態調査報告書 2003 (『日本の図書館 2003』付帯調査)』(社)日本図書館協会。  
ほんごうこども図書館所蔵資料・配布印刷物。  
吉田達也 2001,「生きた指導案づくりに情熱を傾けた日々・地域に根ざした本郷地域教育計画」『図

説 東広島・竹原・呉の歴史』郷土出版社 230-231 頁。

吉田達也 2002a, 「戦後の新教育・本郷地域教育計画 (その四)」『本郷文化 第 12 号』本郷町教育委員会 6-11 頁。

吉田達也 2002b, 「第 52 次教研集会 数学教育基調提案 戦後の実践研究 1947~1953 本郷地域教育計画とほんごう子ども図書館」。

《付記》本稿に関しては、ほんごう子ども図書館の館長吉田達也氏とボランティアスタッフの方にお世話になった。特に吉田館長には、4回に渡る訪問調査における資料の閲覧・コピーと聞き取りで大変お世話になった。記して謝意を表したい。